

保育理念と保育方針

上社保育園の前身は平成7年3月開園厚生省(当時)助成「子育て支援の駅型モデル保育園」です。運営主体は映画を使用した楽しい英語学習と日本人の国際性向上の必要性を掲げた出版社、株式会社スクリーンプレイでした。その後、園の名古屋市認可保育園化に伴い、園の運営は現社会福祉法人に引き継がれました。

こうした本園『誕生の経緯』と『歴史』により、上社保育園の保育理念と保育方針は『子ども達の生きる21世紀国際社会時代の深まりにふさわしい子育て』を目指す保育が伝統かつ独特の特徴となっています。

名古屋市長認可保育園

チャイルドアカデミー上社保育園



発行日 平成28年5月20日

編集・発行

チャイルドアカデミー上社保育園

〒465-0025 名古屋市名東区上社1-409

TEL: 052-779-1152 FAX: 052-779-1151

保育理念**人権の尊重・健全な成長・家族との協力・子育て支援・国際社会****保育方針は「豊かな人間性と国際性の育成」です。****以下の「6つの重点」と「目標」を目指して実行されています。****健康な体**

(健康で安全な暮らしのできる子)

- ・好き嫌いをしないで、なんでも食べることができる
- ・うがい・手洗いなどの習慣を身に付け、清潔な生活ができる
- ・自分の身体に関心をもち、大切にしようとする
- ・器具や道具など、安全に気をつけて使うことができる
- ・いろいろなリズム体操、運動遊び・スポーツを喜んでする
- ・社会のしくみを理解し、交通ルールを守ることができる

**やさしい心**

(友だちと仲良くあそべる子)

- ・好きな友だちだけでなく、誰とでも一緒に遊ぶことができる
- ・遊具や玩具を、友だちとゆずりあって使うことができる
- ・友だちにやさしい言葉をかけたり、助けたりすることができる
- ・先生や友だちの言っていることを静かに聞くことができる
- ・自分たちで遊びのルールを考え、守って遊ぶことができる
- ・お友達をいじめたり、お友達からいじめられたりしない

**豊かな
人間性
と****情緒の発達**

(心情ゆたかな子)

- ・ごめんなさい、ありがとう、などのことばが言える
- ・両親を慕い、兄弟を愛し、祖父母を敬うことができる
- ・小動物や草花などに関心をもち、進んで世話ができる
- ・うれしいことや悲しいことなどを、家族やお友達によく話す
- ・音楽や美術・芸術にふれる事を好み、感動することができる
- ・お絵かき・造形・お手紙など、自分を表現する楽しさを知る

**知識と創造力**

(好奇心旺盛で、自分なりに工夫しようとする子)

- ・いろいろな遊びや行事に興味をもち、喜んで参加できる
- ・初歩的な数字や簡単な文字などを読み、書くことができる
- ・絵本などを読むことを好み、知識を得ることに喜びを感じる
- ・さまざまな生活体験を、自分の遊びに生かすことができる
- ・社会のさまざまな出来事に、好奇心をもつことができる
- ・自分なりに試したり、工夫したりして、遊ぶことができる

**自立と個性**

(自分のことは自分で行うとする、個性的な子)

- ・自分から、好きな遊びを見つけたることができる
- ・遊びの後片づけや、自分の身の回りの始末ができる
- ・約束をすることができ、その約束を守ることができる
- ・グループの中で、役割を受けもって仕事をする事ができる
- ・良い悪いの判断をしようとし、自信を持って行動できる
- ・自分なりの目的をもって、最後までやり通すことができる

**国際性
の育成****国際性**

(世界へはばたく子)

- ・英語に興味を持ち、すこしづつ聞いたり・話したりできる
- ・外国の遊び、食べ物、歌、お話、音楽、自然に興味をもつ
- ・肌の色、目の色、顔かたちが異なる友だちとも仲良く遊ぶ
- ・外国の文化に興味を持ち、感動することができる
- ・世界で活躍している人々を知り、尊敬することができる
- ・世界へのあこがれを感じ、自分なりの夢をもつようになる

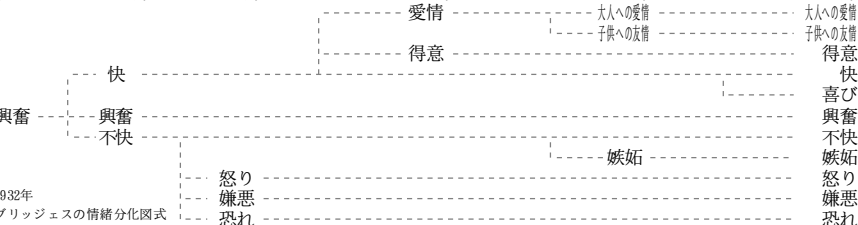
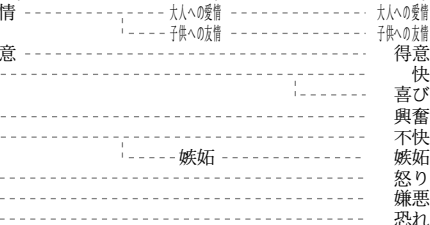


チャイルドアカデミー

上社保育園では、「自由を尊重し、体験学習を重視」しています。

それは、自由な風土が「個性」を伸ばし、実生活での豊富な体験と学習が「好奇心と知識」を育むと考えているからです。

チャイルドアカデミー上社保育園の保育指標(年齢別、標準発達特性一覧表)

	0 才 児	1 才 児	2 才 児
全体	・動物として生まれたヒトから、人間へ育っていく第一歩のとき。 ・依存的時期と芽生える時期。	・ひとりで動けるようになり、ことばによる意志の疎通ができるようになる。自立の始まり。 ・興味や関心に満ちた、探索の時期。	・赤ちゃんの域を脱し、人格形成にかかわる特性が多く現れる。 ・独立心などが多面的に芽生え始める時期。
体力 (運動)	(1ヶ月)・あごを上げる (2ヶ月)・胸 を上げる (4ヶ月)・首がすわる 物をつかむ 支えられて座る (7ヶ月)・ひとりで座る 活発な動作 (9ヶ月)・つかまり立ちをする (10ヶ月)・はう (11ヶ月)・手を引けば歩く (12ヶ月)・家具などにつかまり立ち上がる	(13ヶ月)・はって階段を登る (14ヶ月)・ひとりで立つ (15ヶ月)・ひとりで歩く (24ヶ月)・走る、階段を上下する、飛び降りる。 ・押す、投げる、つかむ、めくる。 ・スプーンを使う、クレヨンでなぐり描き。 ・音楽にあわせて、体や手を動かす。 ・運動機能の発達がめざましい時期。	・立って歩くこともしっかりしてくる。 ・よく転ぶが、走ったりもするようになる。 ・1～2秒の片足立ち、後ずさりもできるようになる。 ・ボールを受け取るまね、投げる動き、足で蹴る動き、転がるボールを追いかけては、けり続ける複合行為も可能になる。 ・手先、指先も器用になり、積み木を積み上げたり、絵本などのページをめくることができるようになる。
感覚 (情緒)	誕生 3ヶ月 6ヶ月 12ヶ月 18ヶ月 24ヶ月  1932年 ブリッジェスの情緒分化図式		・困難、危険に遭遇すると腹立たしさ、恐怖を感じるようになる。 ・救いをもとめる、依存心を表すことも。 ・知りたい、やりたい、でもうまくいかない。 ・「やめなさい」と言われると、泣く、たたくなど反抗する行動をとって発散する ・自分がしようとしたことをわかってもらえたり、またどうしてやめなければならぬか話を聞き、子供なりに納得すると、それまでの感情を抑えることが徐々にできるようになる。
知識 (知力)	・身近な人の声に反応したり、音のした方に目を向けたリ、首を曲げたり、動くものを目で追うなど、聴覚、視覚、さらに嗅覚、味覚、触覚などの一応の基礎ができてくると、手に触れる対象物を探索する活動を繰り返すようになる。 ・この探索活動により、各感覚器官の協応が育っていく。 ・この時期の知識はそのほとんどが感覚器官による体験をもって養われていく。	・諸感覚器官の発達と運動機能がうまく協応できるようになって探索活動が活発になる。 ・投げたり、破ったり、吸ったりと一見意味のないいたずらにみえる事も子供たちにとっては貴重な学習体験。 ・豊かになってきた運動と、感覚による体験を通して、形、大きさ、色、空間などを知っていく。 ・「コレ、ナニ」との質問がはじまる。 ・絵本を読むと喜ぶ、読んでとせがむ。	・独立心が増すことから、さらに好奇心が旺盛になる。 ・親、兄弟などと同じ様な行動を自分でもしたがる。 ・想像力も豊かになり、ひとりでよく遊べるようになる。 ・「つり遊び」＝自ら空想の世界を作り、ヒーロー、ヒロインになって楽しむ。 ・新しいものや新しいことに関心を示し、特に本物への関心が深まる時期。
言語 (会話)	・4ヶ月頃から「アー」「ウー」など喃語が始まり次第に変化に富んできて抑揚がつき、片言へと変わっていく。 ・0才後半には「ニギニギダンゴ」や「オムテンテン」「イナイ、イナイ、バー」などの乳児特有の遊びことばが始まる。 ・また、「これいる？」と言われてうなずいたり、「・・・ちゃん」と呼ばれると手が動くなど、ことばのいらない身ぶりの会話も始まる。	・1才前後から「一語文」がはじまる「マンマ」「ワンワン」など。 ・物には名前があることに気づいて、今度は逆に「コレ、ナニ」と質問 をしていく。名前を知らせると、その名前を反復しながらひとつひとつ覚えていく。 ・1才後半頃から「二語文」がはじまる。「パパ、イナイ」「ママ、バイバイ」 ・積極的な意志表示が可能になってくる。	・「二語文」から「多語文」への時期。 ・言語能力が急速に発達する。 ・おとなから話しかけられる簡単な言葉や文章を大部分は理解できるようになる。 ・おしゃべりをする。会話が楽しいひとときになる。 ・この時期、いかに多くの言葉を耳にするかによって、以後の言語能力がさらに伸びていくかが如実に違ってくる。
社会性 (生活)	・人への働きかけの相手はほとんどが母親ないしは世話をしてくれる人である。 ・笑いかけて快の情緒の表出をする初期段階になると、大人の模倣をしたリ、喃語が豊かに変化して、身振りで意志や欲求を伝えようとする。 ・集団生活の場では、他の子供が遊んでいるのをまねて遊んだり、促されるという様な動作をするようになる。 ・見慣れない人への「人見知り」も始まる。	・「ダメ」という禁止の言葉が理解できるようになる。 ・物を取ってどのように依頼すると理解し行動するようになる。 ・保母の言うことが少しずつ理解でき、励まされたり、誉められたりして喜ぶといった信頼関係の基盤ができること、保母が面白がるような動作をするようになる。 ・順番待ち、交代、片づけができるようになる。 ・頭をさげたり、言葉のあいさつもできるようになる。	・他の人への関わり合いを求めるようになる。 ・他の人への関心から、好んで接触しようとする。 ・ただ、自己中心的で別の人の立場からは物を見ない傾向がある。 ・未知への関心も接触も、将来、社会性を身につけていく第一歩である。 ・新たな協調性の芽生えが、見え隠れする時期に移行していく。

	3 才 児	4 才 児	5才児 ～ 6才児
全体	・「三つ子の魂百まで」＝人間形成の重要期。 ・自分の世界を広げ、「自我」の芽生える時。 ・残存する依存心と自立への不安の交差する時。	・想像力豊かで、意欲的な時期。 ・好奇心おうせに、豊かな体験と環境とのかかわりあいの中でさらに自立が深まる時期。	・5才児は「小型の成人」である。(7才心理学者ゲゼル) ・一人前の人間へと成長する道程のスタートラインに立っている存在。
体力 (運動)	・食事や衣服の着替え、排泄などの身の回りのことも自分でやりたがるようになる。 ・跳んだりはねたり、三輪車に乗ったりなど、運動が活発になってくる。 ・ケンケンや、うさぎ跳びができて、腕を振りながら走ることができるようになる。(「土踏まず」の形成) ・手や指の動きが形成される。物をつまんだり、握り込んだり、左手と右手でピンをもってふたをするなど。	・4才になると体は伸長期に入り、身体諸機能の分化が進み、ぎこちなさがなくなり、運動能力が著しく発達し、手足も伸びてスマートな子どもが多くなる。 ・体のバランスもとれるようになり、リズム運動、スキップ、片足跳びができる。 ・手先の器用さが目立ってくる。ハンカチの結び、はさみや金槌もうまく使えるようになる。 ・さまざまな道具が使えるようになる。	・全身的な体の動かし方においても、手先の巧みな動かし方においても、たいいていこのことは不自由なくこなした運動の発達段階としてはひとりの成熟期にはいる。 ・平均台などの平衡性、マット運動などの柔軟性、他に瞬発力、筋力、協応性、敏捷性、巧緻性、走力、跳躍力など、固定遊具を上手にこなし、ボールや縄などを思いのままに操る。 ・各種の運動で持久力が際だってくる。
感覚 (情緒)	・3才児は「反抗期」「強情期」と呼ばれるように、なかなか扱いにくく、母親泣かせ、保母泣かせの時期。 ・何でも母親にしてもらっていたり、母親がいないと不安でしかたがない「赤ん坊」の状態から「自我」といわれる人格の中核がしっかりと芽生え育ってくる。 ・自立への志向には、子どもにとって不安も伴う。離れるからこそ、愛情を確認したい。 ・甘えられる、認めてもらえる安心感があってはじめて自立心も育つ。	・自我の確立から競争心が起き、しばしばけんかとなる場面も多くなる。 ・強いもの、かわいいものなどへのあこがれの気持ちが強くなり、空想の世界を楽しんでいることがよく見受けられる。 ・体験によって環境との関わり方を学び、友だちということへの喜びも深く感じるようになる。 ・年少児に親切にしたり、赤ちゃんをかわいがったり、欲しいおもちゃも我慢して、譲ったりできるようになる。 ・人を思いやり、我慢できるようになる。	・情緒は細かく分化し、かつ無目的な表現や大げさな表現は少なくなって、一応、基礎的な発達を遂げ、落ち着いた状態になる。 ・本能的な快・不快、そこからくる喜怒哀楽から脱皮し、心理的に複雑な感情を経験するようになる。 ・予測的な喜びとしての望み、予測された恐れである心配や不安、予測が実現されなかったためにおこる失望などが芽生える。 ・一つの情緒の中でその強さと質が分化する。喜びという情緒の中で大得意と有頂天。恐れに系統に属する恥ずかしがりや心配が現れる。
知識 (知力)	・身近な環境は、3才児にとって、不思議な物がたくさんある未知の世界となる。 ・大人にとっては見慣れたいつもの風景も、児童にとって毎日新しい風景に出会うかのように、自分で直接見たり触ったりして確かめようとする。 ・「これなあに」「どうして」と、よく聞く。 ・知識欲はきわめて旺盛で、この驚きや好奇心によって知識がさらに広がり、知的能力も発達していく。	・絵本や物語などの内容を理解し、想像の世界を楽しむことができるようになる。 ・体験とイメージの世界は「ごっこ遊び」や「劇遊び」「集団遊び」の場で、豊かな知識や表現力を養う。 ・周囲の事物、人に対しての関心が一段と強まるため、また、想像の世界が体験に重なる、時として大人には「うそ」と思われるような会話をしかけてくることもある。	・「体験→知識→記憶→応用→試す→学習」の知識サイクルが確立してくる。 ・5才児の特性＝記憶力の発達、記憶の幅の広がり。 ・時間観念や計画的思考、観察力が発達する。 ・文字への興味、関心も際だってくる。 ・物事を発展的に思考できるようになる。 ・なお自己中心的で、構造や材質、形など、純粋に自分から離れた抽象的思考はまだ難しいのが普通。
言語 (会話)	・助詞や接続詞を使って、長い文章を話す事ができるようになる。 ・ただし、言葉がつまったり、どるような話し方になることもある。まだ、心の中で感じているたくさんのことのすべてを言葉にできないためである。 ・こうしたことを繰り返して、自分と誰かという「一対一」の関係におけるコミュニケーションはスムーズなやりとりへとさらに広がっていく。	・あいさつの意味がわかり、使い方がはっきり理解できるようになる。 ・語いの数が多くなり、生活に必要なことばを正しく使って話せるようになる。 ・大人の質問の意味を受け止め、自分の要求や疑問をことばで伝えることができるようになる。 ・自分の興味・関心のあることに、どこでどうしたと細かく話しおしゃべりは止まるどころがないことがある。	・語い、発音、文章のかたちなど、話しことばとしての完成期に近づいてくる。 ・大人との会話がほとんど成立するようになってくる。 ・使いこなせる語いは3000語前後と言われ、副詞や形容詞を使った構文も使いこなせるようになる。 ・認識や思考のための言語機能がはっきりしてくる。 ・意見の交換、衝突なども盛んになる。
社会性 (生活)	・外の世界への興味や関心は、友達を求める気持ちにも通じる。 ・同世代の子どもを強く意識するようになり、近くにいて同じ遊びをしたり、遊具をとられて喧嘩したりする。 ・自己のイメージに固執し、かつ友だちの支援を必要とする3才児はそれを「ごっこ遊び」の世界に求める。 ・特に日常生活「ごっこ遊び」などから、社会についてのイメージを蓄える。	・感情のコントロールができ、言葉で自由に表現できるようになってくると、協同的な遊びを展開できるようになる。 ・自分の気持ちや欲求を優先してけんかになることもあるが、一緒に遊ぶ楽しさを知り、ルールを守って遊ぶことができるようになる。 ・親の立場、家庭の構造も理解できるようになり、こうして身近なところから、外部世界(社会)への扉が開かれていく。	・協同的に遊ぶこともじょうずになり、ひとりで遊びや、傍観の状態、並行的な遊びは非常に少なくなってくる。 ・ただし、グループはまだ2～5人ぐらいの規模。 ・「ごっこ遊び」も各自の役割分担、組織的かつ分化された形になる。 ・自分たちでルールや約束を決めて遊ぶ。 ・リーダーの質も、体力がある子から発想の豊かな子や調整力がある子などになってくる。